![C:\Users\zenrin\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\OYLOII2Q\MC900228485[1].wmf]()園長だより　平成３０年９月号（20180921）

園長　平澤　正則

なるほど，と思った話

―　人間はAIに勝てるか　―

『トマトを買いに行きます。1個100円，２個190円，３個270円のトマトがあります。どのトマトが安い（得）でしょうか。』　小学校の割り算の学習時によくある問題です。この話で始まったこの夏の研修の一コマで特に私の心に残った話を紹介します。

学校で数や量を扱う場合，このように算数科の中で計算の課題として出てくることが多いのですが，私がなるほどと考えさせられたことは，今盛んに叫ばれている幼保小連携（幼稚園・保育園・小学校が連携して生きる力の向上をはじめとした諸課題に円滑に対応していきましょうという取り組みのこと）の観点からすれば，単に割り算の計算をさせて3個270円のものが安くてお得です。などという答えを言わせて終わるのではなく，あなたならどれを買いますか？という個人の考えをもたせ，選ばせる判断力まで育てなければならないのではないかという話でした。

速く，正確に3個270円が安いと計算する力は，やがてＡＩ（Artificial Intelligence　＝　人工知能）にとって代わられる可能性が高いといわれています。そういう力は人間にとってあまり必要でなくなるということです。それよりも，3個270円と安くできる裏には1個くらい腐りかけているのが混じっているのではないか，2個の内1個は評判の悪い外国産なのではないかなどと考える力が必要ではないかということでした。私が子どもの頃，ソロバンや計算尺は非常に高い有用性があり後のち役に立つからと大人にいわれ努力したのですが，大人になったころには計算機ができていてソロバンも計算尺も使ったことはありません。そのように，良いと思って学習したことがあまり役に立たないということはその時代の中によくあることなのだと思います。もちろん，この割り算が暗算でできれば役に立つとは思いますが，学校での算数にはそこまでを求めてはいません。つまり，今学校で教えられている内容は近い将来実生活にはたいして役に立たない（もちろん思考上の基礎にはなるはずだとは思いますが）ことになる可能性が低くないということです。

また，言われたことを言われたとおりに再現する力，これは物事の基礎を習う上で大切なことであり，これはこれで重要だと私は思うのですが，それだけだったらロボットには勝てないでしょう。

　では，将来何が役に立つのか，必要なのか。言い換えると，50年後の「かしこい」とは何か。

人間にしかない力，人間だけが優れている力，これを身につけることだと講師は言うのです。

では，それは何か。もう皆さんもわかっているでしょうが，感情・情緒の類です。やさしさ，おもいやり，喜怒哀楽の気持ち，他人の痛みを感じる力，想像する力など，AIにはできない（たぶんできないであろう。できるとしても相当あとで）分野の力が人間の強みであろうということでした。

　そういう力は幼少の時から普段の生活の中で養われていくものなので，いわゆる良い学校に入ったからといって身につくものではないし，AIをつくる程の知能・技能があったとしてもそれで身につくものでもありません。人間のもつ能力の最大の特長は感情をもっているということであり，AIにはまねのできない（と現時点では多くの人がそう期待している）能力であると思います。

幼少期にいろいろなことを想像し，人との摩擦の中で様々な喜怒哀楽を経験することが，AIにはできない，人にしかできない仕事の基礎になるのであろうと思いました。

　そのようなわけで，私たちは情操教育の充実の重要性に確信をもって今後も取り組んでいかなければならないと考えます。